

2023年度 業務改善活動

人財育成の一環として

死亡患者における リフレクションカンファレンスの導入

担当者：古城 敦子・九澤 美保
芝 美樹



導入の背景

看護部のミッションは、少子・高齢化や働き方改革等、社会生活や個人としての生活様式が多様化する時代において、新規医療技術やAIの台頭に加えて、COVID-19や更なる未知のウイルス感染症への対応等、医療・看護の在り方も変化し続けている。そのような社会で看護師として自律し、環境の変化に柔軟に対応できる「適応力」を身につけ、判断・行動できる人財を育成することである



導入の背景

その人財育成の一つとして、自らの経験を振り返る事によって、新しい気づきを獲得し、思考や行動に変化をもたらしたい。また、リフレクションをすることで自己理解や改善策の発見、成長と学びを促進すると同時に、このカンファレンスを通して、リフレクションすることを習慣づけたいと思い、2023年6月～リフレクションカンファレンスを導入した



実施状況

2023年6月～11月までの死亡患者数 : 67名

カンファレンス 基準の1週間以内の実施 : 47名

1週間以降の実施 : 20名

参加者 : 病棟看護師が殆どであるが、看取り患者に
おいては全て医師・薬剤師・看護師の参加あり



病棟以外でもリフレクションカンファレンスを実施

【外来】急変事例の振り返りを行った

今後は、スタッフ皆で意見を出し合っていける
ようなカンファレンスにつなげたい

【OP室】Spo2低下の患者にすぐに酸素投与ができなかった

事例の振り返りを医師・スタッフと共にカンファ
レンスを行った。振り返ることで課題が分かり
業務改善につながった

カンファレンスを行うことで、他者からの評価
をもらい業務改善につながり、目的にある
看護の質改善につながったと感じる

今後も、話し合い、振り返りは継続したい



師長が感じるリフレクションカンファレンス

- * 看護の振り返りを言語化することで、個々だけでなくスタッフ全員で情報共有し、一人ひとりのスタッフの精神的フォローにもつながっているよう感じる
- * カンファレンスを行うことで、自分たちの関りを振り返り良かった点や、こうすればもっと良かった等、活発な意見を出すことができ、家族の対応もうまくできるスタッフが増えてきた
- * 1週間以内の開催は、日程調整等で難しい



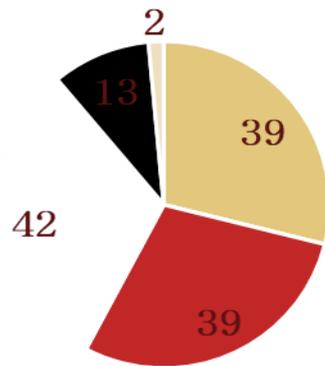
アンケート結果

配布：152名

回収：135名

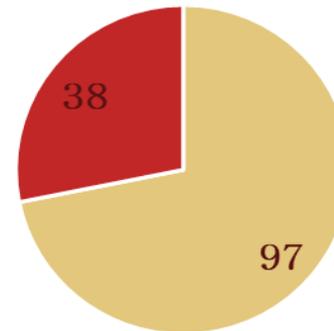
回収率：88.8%

年代



■ 20代 ■ 30代 ■ 40代 ■ 50代 ■ 60代

参加の有無

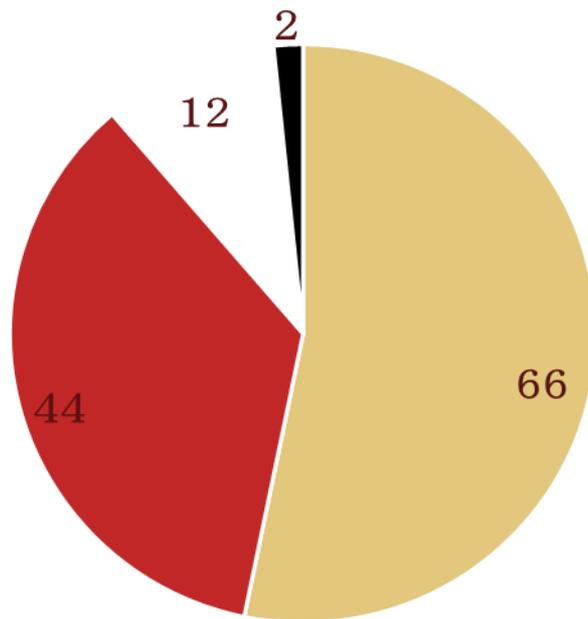


■ 参加 ■ 不参加



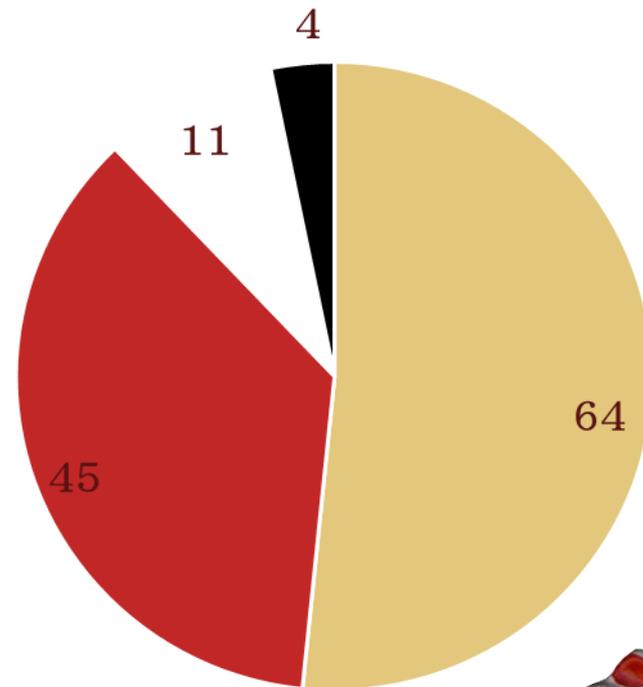
アンケート結果

リフレクションカンファレンスが
自己の成長につながっているか？



■ そう思う ■ やや思う ■ あまり思わない ■ 全く思わない

リフレクションカンファレンスを継続して
いきたいか？



■ そう思う ■ やや思う ■ あまり思わない ■ 全く思わない



まとめ

1. 2023年6月～ 人財育成の一環として、死亡患者におけるリフレクションカンファレンスを導入した
2. 2023年6月～11月までの死亡患者は67名であり、全患者のリフレクションカンファレンスが実施されていた
3. 参加者は、病棟看護師が殆どであるが、看取り患者においては全て医師・薬剤師・看護師の参加があった
4. リフレクションカンファレンスについて看護師長への聞き取り、及び看護職員全員にアンケートを実施し、回収率は88.8%であった



まとめ

5. 死亡から1週間以内のリフレクションカンファレンス実施としたが、日程調整等により期間内の実施は難しいと言う意見が多く、期間は定めないことにした
6. アンケート結果より、「リフレクションカンファレンスは自己の成長につながっているか」の問いに対し、81.5%が「そう思う」「やや思う」と答えている
7. 「リフレクションカンファレンスを今後も継続していきたいか」の問いに対しては、80.7%が「そう思う」「やや思う」と答えている



まとめ

8. 看護部では、看護の質向上の目的で、年に1回スタッフ一人一人が自己の振り返りとして「ナラティブ」を作成している。リフレクションカンファレンスでは、自分の看護だけでなく関わったスタッフとの看護の振り返りとなり、ナラティブを含めて看護の質向上につながっていると感じている
9. リフレクションカンファレンスが、自己成長につながっていない。また、継続したいと思わないスタッフが10.4～11.0%いることから、良い振り返りとなるような内容の充実を図ること、リフレクションすることが習慣づけられるよう働きかけることが、今後の課題である

